

足掛け四年に渡り、工房・寂は「現代音楽シリーズ・ヴァニタス」に取り組んでまいりました（2017年秋まで）。この活動に一区切りがつき、私たちは今年から新たなシリーズに取り組みます。題して「シリーズ・庭」（全3回）。

庭は、ひとときの安らぎを得るために・植物とふれあうために、またあるときは思索のよすがとして、これまでさまざまな様式で作られてきました。優れた庭がアーティストの創作意欲を掻き立てることもしばしば。第1回公演の第1部では現代音楽のアイコン、ジョン・ケージが京都滞在中に訪問した日本の代表的名園に靈感を得て作曲した「龍安寺」をご紹介します。その名を四海に轟かせるこの庭を実際に訪れた方も多いことでしょう。十五の石と砂利で構成された硬質かつ簡潔なこの庭の表現は、確かに人を思索へ誘い、創造へと導くものです。

一方、京都の西・歌枕の地としても松尾の湿潤な大気に包まれ、盛大に苔むした西芳寺の庭園はまさに美の王国。元来枯山水の石組みだけだったものがいつの頃からか苔を生じ、Moss Gardenとして今やこれまた世にその名も高き名園です。第2部では、作曲家自身が松尾や桂川で行ったフィールド・レコーディングにあわせて今年の夏一気に描き切った「西芳寺」をお聴きください。

演奏は大胆な表現と恵まれた声を武器に、さまざまな分野で独特の音楽世界を創り出している声楽家・薬師寺典子、卓越した技術と周到な音楽的解釈で評価を得るオーボエ、イングリッシュ・ホルンの海上なぎさ、自在な表現と精力的な活動で知られるパーカッショニスト・會田瑞樹。両作とも、彼ら三人による緊張感溢れる演奏でお送りします。

会場は現代美術の作品でしつらえられています。旅先へ持ち運ぶことのできる「ポータブル・ガーデン」（雪阿弥作、仕覆制作・竹山佳佑）、香りのうちに京の庭を聞き取っていただけるよう、今回の演奏会のために調合した煉香「Natura in minima maxima」（「自然は最も小さなものにおいて、最も素晴らしい」）の香りも、あわせてお楽しみください。

atelier jaku presents the first of a three-part series of concerts called ‘Gardens’. In this concert, ‘two gardens’, the first half will feature new-music icon John Cage’s seminal *Ryoanji* for oboe and voice with percussion obligato. The world premiere of atelier jaku’s artistic director Daryl Jamieson’s new piece *Saihōji* for voice, cor anglais, and percussion with field recordings fills the second half. Please join performers Yakushiji Noriko (voice), Unagami Nagisa (oboe/cor anglais), and Aita Mizuki (percussion) for a music event aimed at all five senses: including an art installation (*Portable Garden*) by regular atelier jaku collaborators Setsuami and Takeyama Keisuke, bespoke incense (*Natura in minima maxima*) and two specially-commissioned cocktails.

演奏者について

薬師寺典子—Yakushiji Noriko

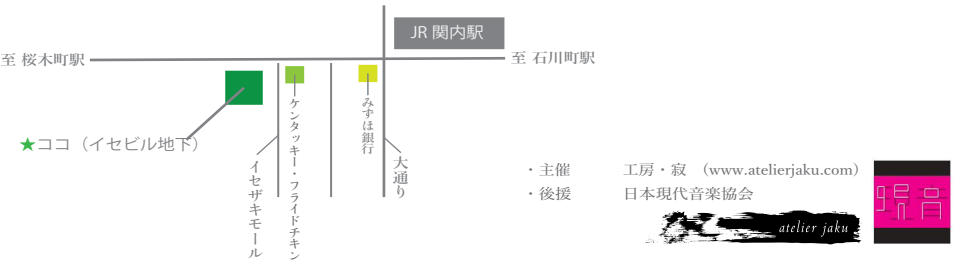
声楽家。東京芸術大学卒業。ブリュッセル王立音楽院修士課程修了。ベルギー政府奨学生、野村財団奨学生。アンス・オペラコンクール入賞。リエージュ王立歌劇場ラヴェル「子供と魔法」子供役をはじめ、モンテヴェルディ作曲の「ポッペアの戴冠」ヴィルトゥ役（ロンドン）ほか、スペイン・シルガ現代音楽祭、ベルギー・アルスムジカ現代音楽祭等に出演。TWS「現代音楽企画ゼミ」にて企画が選出され、東京文化会館小ホールにおいてコンサートを企画、出演。日仏現代音楽協会会員。

會田瑞樹—Aita Mizuki

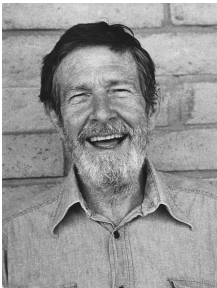
打楽器奏者。宮城県仙台市生まれ。武蔵野音楽大学大学院修士課程修了。佐々木祥、星律子、吉原すみれ、神谷百子、有賀誠門、藤本隆文の各氏に師事。日本現代音楽協会主催の第九回現代音楽演奏コンクール「競奏IX」において第二位入賞など、受賞歴多数。NHK-BS プレミアム「クラシック倶楽部」に出演、『with…』（朝日新聞推薦盤）などこれまでに3枚のアルバムを発表し、いずれも高い評価を得ている。ホームページはこちらを参照のこと：
<http://mizukiaita.tabigeinin.com>

海上なぎさ—Unagami Nagisa

オーボエ、イングリッシュ・ホルン奏者。東京音楽大学卒業。同大学院器楽演奏領域科目等履修生修了。2001-2 年、東京音楽大学ソロ・室内楽演奏会オーディション合格。2002 年には京都・国際音楽学生フェスティバルに室内楽およびオーケストラ首席奏者として参加。現在では国内の各オーケストラへの出演やミュージカル、レコーディング等への参加のほか、室内楽、オーボエ指導などで多彩な活動を展開している。これまでにオーボエを吉成行蔵、浜道晃、江原泰子、佐々木亜衣の各氏に師事。



- ・チケットのお取り扱い、お問い合わせは工房・寂（メールは atelier.jaku@gmail.com）までお願い致します。
- ・レセプション・パーティにご参加の方は、チケットお申し込み時にあわせてお申し出ください。
- ・当日の演目、編成、出演者は予告なく変わることがあります。
- ・お越しの際は是非、公共交通機関をご利用ください。最寄は JR/ 地下鉄ブルーライン阿内駅（徒歩3分）です。
- ・工房・寂のフェイスブック・ページ (www.facebook.com/atelierjaku)、インスタグラム (@atelierjaku) も是非ご覧ください！



John Cage
Photographer © Betty Freeman
Courtesy of the John Cage Trust

ジョン・ケージ—

John Cage (1912-1992) は、アメリカの作曲家。シェーンベルクに師事して作曲を始めた。偶然性を作品に取り入れた『易の音楽』などを発表。以後、不確定性の音楽に至る。生涯を通じて現代音楽シーンを牽引しただけでなく、前衛芸術一般に影響を与え続けた巨星である。

ケージの作品には日本との深い関わりを感じさせる作品も多い。今回演奏する「龍安寺」もそうした作品の一つであり、これまで様々な楽器編成で演奏されてきた。

「龍安寺」は音の庭とも、ケージの枯山水理解を音響化したものとも言え、彼の後半生において特にユニークな作品と見なされている。

Ryoanji is a title shared among five pieces of music and more than 170 artworks by John Cage. They are only some of the large number of Cage’s works which show the influence of Japanese culture on his thought. The musical compositions (two of which will be performed – simultaneously) are sonifications of his image of the famous Kyoto stone garden. The uniquely pulsing percussion obligato represents the raked gravel – the minimally-changing ground of the work. The voice and oboe represent the 15 large stones – solidity shifting from moment to moment.



ゼミソン・ダリル—

Daryl Jamieson (1980-) はカナダの作曲家。ヨーク大学博士号を得たのち文部科学省の奨学金を得て来日。東京芸術大学で作曲を近藤譲氏に学ぶ。現在、昭和音楽大学非常勤講師。

日本の伝統芸術や哲学に対する強い関心に裏打ちされた「ヴァニタス・シリーズ三部作」（本作で第3回・柳憲コンテンツボラリー賞受賞）など、音楽の可能性を探る挑戦を続けているが、作曲に並行して研究活動も進めている（「Uncanny Movement through Virtual Spaces: Michael Pisaro’s *fields have ears*」(2018) など）。

西芳寺」は、近年取り組んでいる「歌枕シリーズ」の第3作。フィールド・レコーディング、和歌、そして自然物を用いたパーカッションを通して、人の営みと環境について、また常なるものと常ならざるものについて語った作品である。

A garden built, ruined, rebuilt, abandoned, colonised by moss, then preserved in its overgrown, hyper-green state – Saihōji (Kyoto’s ‘moss garden’) is a testament to the beauty of nature overcoming human work. Yet it also exists in a fragile environmental equilibrium under threat by ever hotter, drier weather. Through words, music, and field recordings, *Saihōji* explores the garden as a place, an idea, and a symbol of human care for and destruction of the natural environment.